

研究結果報告書

「満洲国」時代のハルビンにおける日本人の文学活動についての研究

所属：華南師範大学外文学院 外国語学部 日本語科

役職：準教授

氏名：呉 佩軍 （他2名）

本研究は20世紀前半期のハルビンにおける日本人の文学創作活動と体験を考察した上で、日本知識人のアイデンティティ及び他者認識の変遷を明らかにするものである。ハルビンにおける日本人の文学創作活動は四つの段階に分けられ、旅行者或いは定住者としての文学者によって推し進められたものである。

第一の段階はハルビンの誕生から1918年シベリア出兵である。ロシア人はハルビンの支配民族であるのに対して、日本人は外来者としてロシア人に従属した。ハルビンは日本の旅行者にとって西洋文化を体験する場となった。二葉亭四迷・夏目漱石などの旅行者によって書かれた紀行文には、ロシア文化に対する崇拝と抵抗の複雑な気持ちが潜んでいる。

第二の段階は1918年シベリア出兵から1932年ハルビン占領までである。ハルビンは帝政ロシアの植民都市から束縛のない都市と変わった。ロシア人は優位性を失ったのに対して、日本の存在は強くなった。日本人の紀行と創作においては、自由とロマンを求める意欲が見られる。

第三の段階は1932年ハルビン占領から1941年「満洲国芸文指導要綱」公布までである。ロシア人は支配民族から賤民へと、日本人は外来者から支配民族と身分を転じた。ハルビンが「北進の基地」と位置づけられた。この町を舞台とした日系文学が本格的に発足した。竹内正一などハルビンに定住した文学者は旅行者の代わりに、植民地都市文学の語り手となり、ハルビンの都市空間と社会の分裂状態を浮き彫りにした同時に、民族間の葛藤を描き、植民主義に対する複雑な感情と嫌悪感を表した。

第四の段階は1941年「満洲国芸文指導要綱」公布から「満洲国」崩壊までである。「複合民族国家建設」のスローガンの下で、思想統制の強化がされ、自由的に創作する空間がなくなり、国策文学の創作が義務づけられて、写実主義文学創作も終焉した。

このように、ハルビンは日本人にとって、西洋文化体験の場から「北進の基地」となり、日本人の文学創作活動も自己探求と他者観照の実践から政治的行為と変わっていった。

研究成果の公表について

<p>口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)</p> <ol style="list-style-type: none">1 「20世紀前半期のハルビンにおける日本語定期刊行物の系譜」・呉佩軍・第一回「中日比較の視点からの日本学研究シンポジウム」・2017.03.25・中国広州華南師範大学2 「満洲国時代のハルビンの都市表象」・呉佩軍・第五回「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」・2017.10.27-29・韓国ソウル高麗大学と東国大学3 「ハルビンの傅家甸をめぐる植民主義的言説——『極秘魔窟・大観園の解剖』を中心に」・呉佩軍・第一回「江西省日本語教学と日本学研究フォーラム」・2017.11.3・中国南昌江西師範大学4 「地政学の視点から見た日本帝国の北満移民政策」・呉佩軍・「東亜漢文化圏の中の日本語教育と日本学研究フォーラム」・2017.12.23・中国広州暨南大学
<p>論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)</p> <ol style="list-style-type: none">1 「日系作家に描かれたハルビンのロシア人女性」・呉佩軍・『日本学研究』・2018年6月掲載予定2 「竹内正一に描かれたハルビンの都市表象」・呉佩軍『跨境』・2018年6月投稿中3 「満州国の文芸統制とハルビン文芸家協会の役割」・呉佩軍・『中国日本文学研究会論集』・2018年8月掲載予定
<p>書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)</p> <p>『偽満洲国文芸大事記』・劉春英、呉佩軍、馮雅・北方文学出版社・2017年1月</p>